

## 「学生が変える日本大学」第7章 —「令和2年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」における取り組み—

竹田 匠<sup>1).2)</sup>, 吉田未来<sup>1).3)</sup>, 大貫陽司<sup>1).4)</sup>, 青砥光希<sup>1).5)</sup>, 小林歩武<sup>1).6)</sup>  
竹田蘭丸<sup>1).7)</sup>, 落合凌也<sup>1).8)</sup>, 梅村智輝<sup>1).9)</sup>

<sup>1)</sup>「日本大学 令和2年度学生FD CHAmmiT」学生スタッフ, <sup>2)</sup>日本大学商学部経営学科3年,  
<sup>3)</sup>日本大学通信教育部法学部政治経済学科4年, <sup>4)</sup>日本大学経済学部金融公共経済学科3年,  
<sup>5)</sup>日本大学文理学部哲学科3年, <sup>6)</sup>日本大学国際関係学部国際教養学科2年, <sup>7)</sup>日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年,  
<sup>8)</sup>日本大学経済学部経済学科3年, <sup>9)</sup>日本大学生産工学部数理情報工学科3年

「日本大学 学生FD CHAmmiT」は、日本最大規模の総合大学である本学のスケールメリットを活かし、学生と教職員が互いの視点から授業改善について議論し、その具体策を考案する学内イベントである。本会は「日本大学 学生FD CHAmmiT 2013」として始まり、今回で8回目を迎えた。本稿は、日本大学における「令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT」の開催に至るまでの過程と開催後のアンケート結果を踏まえて、学生スタッフの視点で今後の課題と展望を述べた活動報告書である。本活動報告が今後の日本大学の「学生FD活動」の更なる発展に貢献することを期待したい。

キーワード：FD (Faculty Development), 学生FD, 「令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT」

### はじめに

「日本大学 学生FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生FDサミット」の「日本大学版」である。「学生FDサミット」とは全国の大学から学生FD活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表し合い、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とはCHATとSUMMITを掛け合わせた造語であることから分かる通り、大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、日本大学全体の学生・教員・職員が参加できることも大きな特徴である。

今回で8回目を迎える「日本大学 学生FD CHAmmiT 2020 (以下, CHAmmiT)」は、史上初のオンラインでの開催となったが、225名の参加があった。初めての最大のオンライン実施に際して、これまでの対面形式にいかにか近づけられるかが課題となったが、それを模索しながらイベントを企画し、開催することができた。

## 1. 「CHAmmiT」開催までの流れ

今回の「CHAmmiT」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって開催そのものが危ぶまれた。しかし、学生の「CHAmmiT」を開催したいという強い希望と学生の希望に応えたいと考える教職員の思いがあったからこそ実施することができた。学生と教職員の思いが一つとなり、「CHAmmiT」開催に向けて皆が一丸となって行動することになった。従ってこの企画は大変価値のあるイベントだったといえる。今年は授業を主とした大学生活の大部分がオンライン上での活動となり、運営スタッフを確保できないかもしれないという不安もあったが、結果的に日本大学の教育をより良くしたいと考える意欲的な学生が集まった。今年のテーマは、オンライン授業の課題点などを共有し、それを授業改善などに向けて反映させるというものであった。こうしたテーマを設定したのは今のオンライン授業の実施状況について、学生は課題を感じており、これを改善したいという強い思いが学生の間にあったからである。

### 1-1 第1回スタッフミーティング（令和2年7月11日）

第1回は初回ということでまずCHAmmiTの概要を学生スタッフに説明した上で、今回のメインテーマであるオンライン授業のメリット・デメリットについて班ごとに分かれて話し合った。話し合ったことはGoogle Jamboardにまとめて、全体で共有した。ここではメリット・デメリットに関する代表的な意見をまとめておく。メリットとしては、例えばオンライン授業は対面のようにわざわざ移動の時間をかけて大学に通わなくても良く効率的であるという意見が挙げられた。一方で、デメリットとしては、学生同士の繋がりを築き難く、教職員とのコミュニケーションもとることができないため、ただ大学の授業を受動的に視聴しているだけになってしまい、つまらないという意見が挙げられた。議論は活発に行われたものの、Google Jamboardに入ることができない人がいるなどオンラインミーティングにおけるスキルやツールに関する課題も見つかった。

### 1-2 第2回スタッフミーティング（令和2年8月22日）

第2回では、第1回目で挙げられたメリット・デメリットについての意見を共有し、学生・教職員の両者の視点に立ってオンライン授業の改善点について話し合った。私たちは学生であるため学生視点のオンライン授業の改善点は簡単に出すことができるが、私たちとは異なる立場にある教職員視点でのオンライン授業の改善点を挙げるのが少し難しいところもあった。例えば、学生視点で考えると課題の量が過多で学習効果に疑問があるという意見があったが、教職員の視点で考えてみると、オンライン授業だからこそ課題の量を多くして学生の理解度を高めたいという考え方もあった。また、学生がコミュニケーションの不足を感じているように、教職員もまた同様に感じていることが確認できた。

### 1-3 第3回スタッフミーティング（令和2年9月19日）

第3回では、学生がよいと考えるオンライン授業の要素と、学生が課題であると感じた授業の要素についてをランキング形式でまとめた。さらに、授業態度についても教職員と学生の立場から課題となる要素をランキングした。学生がよいと考える授業としては、ITスキルが高い授業、先生から適切なフィードバックがある授業、見やすく工夫された動画授業などが挙げられた。一方、学生が課題があると感じている授業としては、音声・動画・解説なしで資料を配られるだけの課題提示型の授業、教員による暴言とも受け取れる発言がある授業、受講生や教員の携帯の通知音がよく鳴る授業、授業時間が極端に短い授業などが挙げられた。また、学生の授業態度については、授業を妨害する学生、オンライン授業の意図を理解していない学生、

カンニングをする学生などが挙げられた。これらの点を確認する作業は、それぞれの解決方法はどのようなものかを考えるきっかけとなった。

#### 1-4 第4回スタッフミーティング（令和2年10月10日）

第4回はコロナ禍における学生・教職員にとっての「大学とは」というテーマについて議論した。これは前回の「CHAmmiT」のテーマであり、この議論の目的はコロナ禍になる前の「大学」とコロナ禍に直面した「大学」とを比較してその違いをどのように埋めていくべきかについて考えるというものだった。コロナ禍になる前は、学生からは、勉強や部活動などに積極的に挑戦できたという意見が多く挙げられた。一方、教職員からは、キャンパスで教育は学生・教職員双方が継続的に成長し学びを深めていく場であったという意見が多く出た。しかし、コロナ禍になったことでその「大学」のイメージが変化していった。例えば、学生からは良くも悪くも自分次第であるという意見や授業内課題をこなすだけの場所という意見が多く挙げられた。教職員からは顔も知らない学生に授業をする場所という意見や研究で大学に行けなくなったなど、マイナスの意見が多く挙げられた。

#### 1-5 第5回スタッフミーティング（令和2年11月7日）

第5回目は、前日リハーサル前の最後のミーティングとなった。今回は学部提案書の作成を行った。これは第1回から第4回スタッフミーティングを活かして、どのようにすればよりよい大学生活を送れるのかについて考えるというものだった。CHAmmiT本番まであと少しだったが、一般スタッフがうまくファシリテーションできるかということも課題に挙げられた。ファシリテーションのスキルに個人差がある状態だったため後日、改めてファシリテーションの練習を行った。また、今年は事前資料を動画で公開するという新たな試みを決定し、その準備にあたった。

#### 1-6 第6回スタッフミーティング（前日リハ）（令和2年11月28日）

前日リハーサルでは、現地に集まるスタッフは10時に集合し、最終的な確認とパソコンとの接続、オープニングとエンディングの最終確認を行った。その後、13時から現地に集まるスタッフ以外も含めた最終的なリハーサルとして、当日のファシリテーションマニュアルの読み合わせを行ったり、コツを説明したりして、当日と同じ時間配分でしゃべり場の練習を行った。その後、当日のスケジュール確認し質疑応答を行った。

#### 1-7 令和元年度日本大学学生FD CHAmmiT 当日（令和2年11月29日）

当日は以下のように進行した。例年と異なり、今回はオンラインで行うため、参加者の疲労を考慮して、開催時間を1時間短縮させ懇親会も取り止めた。しかし、内容を詰め込みすぎたため、多くのグループで議論する時間が足りない事態が見受けられた。

Zoomの利用方法の説明が不十分であったため、ブレイクアウトルームへの移動に時間がかかった人が多く、しゃべり場が始まって10分以上経過しても入れなかった人がいたことは今後の課題である。今年度は初のオンライン開催ということもあり、混乱を避けるため他大学からの参加は見合わせた。

##### 1-7-1 10:00～ 現地スタッフのみで打ち合わせ

10:00にスタッフが現地集合し点呼を行った。エンディングで流すビデオの最終確認とZoomでの出欠確認のフローを再確認した。

### 1-7-2 11:30～ 現地スタッフ以外も含めた最終打ち合わせ

11:30より現地集合以外のスタッフを含め、当日の流れを最終確認した。ファシリテーションマニュアルとファシリテーションのコツをコアスタッフから説明し質疑応答を行った。また、この際に自分たちから伝達しきれていないこともあり、万が一この時点でスタッフからの質問がなければ、本番が混乱していた可能性も十分に考えられるため、来年度開催への反省点としたい。

### 12:30～ 一般参加者受付開始

Zoomでの開催ということもあり参加者の出欠確認を手動で行うことにしていたが、一度に多くの人が入室するため全ての人を確認することができず、後で確認することになった。一般参加者が入室後は、数秒ごとに変わる注意事項のスライドをBGMとともに流した。

### 13:00～ オープニング

挨拶とコアスタッフの紹介をした上で、当日のスケジュールと参加者に注意して欲しいこと、より楽しんでもらうためのコツに関する説明を行なった。その後、ブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスを行い移動した。

### 13:30～ アイスブレイク

ブレイクアウトルームに移動した方から順に自己紹介とコロナによって変化したことや新たに始めたことなどにつき、自由に対話を楽しんだ。時間の都合上、コンセンサスゲームなどはできなかったためこのような形をとった。

### 13:50～ シャベリ場① オンライン授業のメリット・デメリット

シャベリ場①では、学部を越えたメンバー構成となるようなグループに分かれ、学生や教職員が感じているオンライン授業のメリット・デメリットについてお互いに意見を共有し合った。このセッションでは一つの結論を出すのではなく、他学部の意見も聞くことで各々が視野を広げ、学部提案書の作成に役立てる狙いがあった。

### 14:15～ シャベリ場② オンライン授業のミライの形

シャベリ場②では、メンバーを変え、シャベリ場①で出た意見に基づき、デメリットであった部分を改善していくにはどのようにしたらいいのか、反対にメリットである部分をアフターコロナでどのように活かせるのかについて議論を深めた。このセッションではシャベリ場①と同様に、シャベリ場③での学部提案書の作成に繋げるように意識した。

### 15:00～ シャベリ場③ 学部提案書の作成

シャベリ場③では、学部ごとに分かれて議論した。シャベリ場①とシャベリ場②で話し合ったプロダクトを元に、どのようにそれらを自学部で活かしていけるのか、実際に学生がオンライン授業で感じていることをいかに引き出すのかを意識し、各学部の教職員に提案する書類を作成した。

### 15:40～ エンディング

エンディングでは、シャベリ場③で話し合ったプロダクトをそれぞれの学系を代表して商学部・生産工学部・薬学部の3学部の学生に発表してもらった。発表後、CHAmmiTを双方向性のあるものにするために、

Zoomの機能を用いてアンケートを行なった。その後、日本大学副学長、日本大学FD推進センター長である本田和也教授よりご挨拶をいただいた。最後に、事前に作成したエンドロールを流し、「令和2年度日本大学学生FD CHAmmiT」は閉会した。当日は、教職員の多大なるご尽力のおかげもあり、ブレイクアウトルームの移動以外の問題はほとんどなく、無事閉幕することができた。

## 1-8 第5回日本大学オンライン授業に関するシンポジウム（令和2年12月19日）

### 15:00～ 第一部 令和2年度日本大学 学生FD CHAmmiT の報告

第一部では、CHAmmiTについて不案内である教職員を考慮し、CHAmmiTの説明や今年度の開催の経緯を説明した。報告①では、CHAmmiTで挙げた生の声を中心に学生が感じているオンライン授業のメリット・デメリットを説明した。次に、報告②ではオンライン授業のミライのカタチとして、「マイナスをゼロにする提案」と「ゼロをプラスにする提案」に分けて説明を行なった。「マイナスをゼロにする提案」では、CHAmmiTの中で多くの学生から挙げた交流機会の減少やシラバスの改編がされていないといった内容について話した。「ゼロをプラスにする提案」では、オンラインのメリットを活かした外部講師の積極登用や対面とオンラインの併用などプラスの付加価値を与えていけるような提案を行なった。

### 15:50～ 第二部 学系別、学生・教員によるディスカッション

第二部では、文系・理系・医歯薬系に分かれて学生と教員によるディスカッションを行なった。教員がファシリテーターとなり、学生から話を聞くことで、学生が抱えている悩みや不安について教職員がより深く理解する貴重な機会となった。

## 1-9 事前準備からシンポジウムまでの反省点

今年度は反省すべき点が多くあった。主に、組織面・タスク管理面・成果面・運営面から見ていく。

まず、組織面ではオンラインコミュニケーションの難しさを痛感した。見知った仲でのコミュニケーションであればオンラインのみでも問題はなかったが、新しく顔を合わせるスタッフが30名前後いる中で十分な信頼関係を早期に構築することに苦勞し、その結果、具体的な施策を出すこともできず、結果として10人以上の離脱を産んでしまったことは大きな反省点である。さらに、ミーティングごとに議論する内容をコアスタッフのみで決めてしまったためか、本番で議論すべきテーマを募ったものの、他のスタッフの中からは意見が上がってくることはほとんどなかった。コアスタッフで一方向的に決める形をとってしまったことは、例年からあったこととはいえ、引き続きの課題であり、スタッフ途中離脱の要因の一つになったのではないかと考える。

さらに、コアスタッフの中でも仲違いし、離脱する学生がいたことは組織的な面で大きな反省材料であると考えられる。波長が合わないということはあったのかもしれないが、それをうまくまとめていけなかったこと、遠慮してしまい自分の意見を素直に言うことができなかったことでこのような結果になってしまったことは、オンラインでの運営の難しさと考えられる。

タスク管理面では、期限を守れていないものが散見された。今年度のCHAmmiTでは、コアスタッフで行わなければならないタスクを個人に割り振っていた。しかしながら、個人の裁量に多くを任せていたため、期限までに提出できないものや、コアスタッフ内でのチェックのフローを設けても徹底できていないものがあった。それにより、再三のチェックや誤字が散見され、職員の皆さんに手間をかけてしまうことが多くあった。次年度からは事前にスタッフ内で確認するフローを挟み、確認を徹底したい。

成果面では、全体的な流れはまとまっていたが、プログラムの要素が多くなりすぎてしまった。そして、限られた時間の中で話せるのかなどのシミュレーションを行わず、結果として多くのグループで時間が足り

ず、まとめきれないまま次のセッションに進むという結果になった。そのため、未完成なプロダクトになってしまったグループが多くあり、貴重な機会を逃してしまったように感じた。さらに、オンライン授業に関しての表面上のメリット・デメリットで話が終始してしまい、学生が真に感じている意見を拾い上げることができなかったことは大きな反省点である。

運営面では、参加者自身でブレイクアウトルームに移動できない人が多く出てしまったため、しゃべり場内での入室タイミングのずれがプロダクトの作成に非常に大きな影響を及ぼしてしまったことである。これには、①事前の動画資料で案内できていなかったこと、②移動する方法をオープニングで示すことができていなかったことが原因と考えられ、次年度もオンラインでの開催になるのであれば改善したい。

## 2. 参加者のプロダクトの分析

本節では「令和2年度 学生FD CHAmmiT」の参加者のプロダクト（しゃべり場①②③で作成された成果物）を分析する。

### 2-1 しゃべり場①（オンライン授業のメリット・デメリット）

しゃべり場①では、学部混合のグループに分かれてオンライン授業のメリット・デメリットについて考えて意見を共有し合った。

全体的にみると文系・理系・医歯薬系に共通してみられる意見が多くあった。メリットとしては、「いつでもどこでも授業を受けられる」「自分の時間が増えた」「オンデマンドは何度でも見返せる」という意見が多く、反対にデメリットとしては、「モチベーションの維持」「人との交流がない」「授業の理解度に差が生まれる」などが多くみられた。

そのほか、「実習ができない」といった理系医歯薬系のデメリットなど、学部ごとの特徴があらわれた意見も見られた。

結論として、学系に関係なく共通した意見が数多くあったので、それらのデメリットを改善できればオンライン授業においても対面形式と同じように学習ができるので、あとは学部ごとに学生と教員がそれぞれの意識によってどうデメリットを克服していくかが課題である。この課題を解決すべくしゃべり場③の学部提案書の作成につながられた。

### 2-2 しゃべり場③（学部提案書）

しゃべり場③では、学部ごとにグループに分かれ学部提案書を作成した。

文系・理系・医歯薬系に共通する、オンライン授業に対するメリットやデメリットが多くあるものの、それぞれの学系ごとの特徴も現れた。文系では、交流機会の減少や授業でのコミュニケーションの減少が挙げられた。一方で、オンデマンド授業により、時間を調整して課外活動・就職活動に励むことができたなどコロナ禍であっても、「自ら学び、自ら考え、自ら道をひらく」日本大学の教育理念である「自主創造」に基づいた行動を行った学生も多くいた。理系では、オンラインでは実験の質が格段に落ちてしまう、資料が多くコピーするのが大変というデメリットもあったが、自分の時間を作りやすくなったことにより、例年よりも調査や研究に取り組むことができるという理系ならではの特色が出る結果となった。また、医歯薬系では、オンライン授業の出席率が低下し、ほとんどが必修科目であるため留年してしまう、他の学生がどのくらい勉強しているのかわからないというデメリットが挙げられた一方、タブレットを配布している学部ではペーパーレス化に繋がり非常によかったという意見も挙げられた。

それぞれの学部の主な意見に関しては、下記に添付する表をご参照いただきたい。

学部	オンライン授業に賛成	オンライン授業に反対	改善	改良
グループ 1 (法学部)	自分の時間が豊富	授業形式がバラバラ 学校の施設を活用できない	質問フォームの 設置 教員間での課題 量の共有	学生間の交流場 所がほしい
グループ 2 (法学部)	いつでもどこでも受 講できる 履修の自由度がある	授業妨害 カメラオフは顔が見 えない	投票機能の活用	オンラインで交 流会 対面でもオンラ インの要素を
グループ 3 (法学部)	通学時間がなくなる	オンラインと対面の 併用はかえって授業 統一の妨げに	オンラインサポ ートセンターの 周知	学生間の交流会
グループ 4 (文理 学部)	自分の時間が増える 通学時間がなくなる	学校の施設が使えな い コミュニケーション の機会が減る	授業によっては オンラインの方 が効率良い	学生同士の交流 の場 オンライン黒板 の採用
グループ 5 (文理 学部)	自分の時間が多い	評価基準がバラバラ 実習ができない 通信障害	採点フォームが 怪しい 学部の距離感	オンライン社会 人聴構生制度の 発展
グループ 6 (文理 学部)	通学時間がなくなる 1限の授業が履修し やすい	通信環境の整備が大 変 学校の施設が使えな い	課題提出方法の 統一 教員の IT スキ ルの差	交流会の開催
グループ 7 (経済 学部)	自分の時間を自由に 使える 何度も復習できる	モチベーションの維 持 オンとオフのメリハ リが大変	質問する場を増 やす	学生間の交流会 オンラインと対 面の併用
グループ 8 (商学 部)	何度でも学習できる 通学時間がいらな い	課題の提出方法がバ ラバラ 交流がない	課題管理ツール を活用 学校の通信環境 を学生に提供	1年生のために 交流会 他学部履修
グループ 9 (芸術 学部)	オンデマンドは巻き 戻し機能などで何度 でも学習できる	成績基準がわからな い 授業の資料の著作権 感性の共有が困難	外部講師を招い て全く違う単発 授業を作る	SNS を用いての 交流
グループ 10 (芸 術学部)	自分に合わせて学習 できる Zoomのチャット機能 で先生と交流できる	同じ授業の受講者や 先生の顔が見えない ときが多い 実習ができない	課題に対して先 生からのフィー ドバックがほし い	話したい人と SNSで話せるよ うにする環境づ くり

グループ 11 (国際関係学部)	自分の時間が増えた	Zoomの授業時の態度	ITスキル向上 教材を直接購入したい	オンラインと対面の選択 復習教材がほしい
グループ 12 (国際関係学部)	実家で授業が受けられる	授業内のディスカッションの機会がない	シラバスのオンライン対応を	都心学部の授業 (他学部履修)
グループ 13 (危機管理学部)	オンデマンドなら何度も見返せる 自分のペースで授業を受けられる	授業の質に差がある 先生との距離が遠い	オンライン授業のやり方がバラバラ 学部内の交流機会がない	キャンパスにオンライン授業のための部屋がほしい
グループ 14 (スポーツ科学部)	資料や動画を何度でも見返せる	課題が多い 授業妨害が多い 通信環境のせいで授業に支障がある	教員間で交流会を行い授業の質を均等化してほしい	授業妨害した人に対して処罰を
グループ 15 (理工学部)	コロナが不安なのでオンライン授業は安心	テストがカンニングし放題 通信環境によって授業に支障が	学生の理解度チェックがしやすい 課題のフィードバックを	双方向授業 交流会 キャンパスの有効活用
グループ 16 (理工学部)	自分のペースで受講できる 船橋(違うキャンパス)の授業も受けられる	一つの授業を受けるのに時間がかかる 質問への答えがすぐに返ってこない	メモする時間を考えた授業時間の配分 対面でしかできないことは対面でやる	対面講義のための復習の動画 オンデマンドと対面の併用
グループ 17 (理工学部)	時間の管理・節約 柔軟に予定を組める 何度でも見返せる	実験系は実際に手で作業したい 通学により家と学校のメリハリ	通信障害への対策 教員間での課題の量を共有	オンラインなどの使い分け 図書館や学食などの利用
グループ 18 (生産工学部)	座学の振り返りをしたい	理解度がわからない 成績の統一化	匿名で記入できるアンケートを増やす	学生・教員の交流の場 誰でも生産工学部の授業が覗けるもの
グループ 19 (生産工学部)	オンラインでも十分に受けられる授業があったから	実験や実習は対面がいい 学生と教員との間に距離が空いてしまう	Zoomを使った質問の回答 受講する環境に差があるので改善	対面授業とZoomの同時双方向で授業中も録画して見返せるように



グループ 20 (工学部)	動画があると復習しやすい 時間の有効活用ができる 学生の復習用教材として残せる	課題が負担 コミュニケーション不足 対面とオンラインの同時進行は資料作成の負担が増加	出席確認・課題形式・授業形式の統一 学生同士の交流の場の不足解消	配信時間の統一・調整 対面授業の録画配信 工学部内でのしゃべり場
グループ 21 (工学部)	好きな時間を有効活用できる	先生に顔を覚えてもらえない メリハリがつかない 実験実習の機会がなくなる	出られる学生は対面, 出られない学生はオンライン 1年生の授業は対面で	他学部他学科の授業を履修したい 遠隔でできるものは積極的に利用
グループ 22 (医学部)	時間にゆとり集中できる 質問しやすい 動画を繰り返し有効利用	実習ができない 学生間も教員と学生もお互いの様子かわからない 通信環境の差	大学内の通信環境の改善 教員のオンライン配信ツールの使い方講座	オンラインと対面を選べるようにする オンラインでも問題のない授業はそのままでもいいかも
グループ 23 (歯学部)	授業を録画できるので復習しやすい 資料の共有がしやすい 通学時間がなくなるため	専門知識が入りにくい 出席管理の問題 時間を守ることは将来の診療に関わることから	オンライン環境の整備。基準明示 授業専用のソフトウェアの作成 時間割の共有	出席のカウント 雑音対策 課題の提出形式の統一
グループ 24 (松戸歯学部)	復習がしやすい 時間を有効活用できる	質問がしにくい 友達が作りづらい オンライン授業があってもみんな受けてない	オンライン授業と対面の完全なハイブリッド型 確認試験を増やす	対面での出席差に対する加点 オンラインでの交流会
グループ 25 (松戸歯学部)	ペーパーレス化 効率的に学習できる オンデマンド 資料作成, 説明がしやすい	黒板が見えにくい 配信録画ミス サボってしまう	講義と実習の日を分ける 対面授業との差を縮めて欲しい	質問しやすいフォーマットの設置 学際的な講義の受講
グループ 26 (生物資源科学部)	いつでも授業を受けられる 聞き逃した部分を再確認できる	実験実習が受けられない 回線環境が悪い	オンライン授業にガイドラインを作る 少人数実習実験	他学部履修 対面・オンラインのハイブリッド

グループ 27 (生物資源科学部)	授業を詰めることで時間の有効活用 感染リスクの軽減 選択の幅が広がる	友達と勉強した方が効率的 講義はオンラインで行うなど必要最低限の移動にする	課題提出方法の簡易化とフィードバック プリンター・通信環境の負担	学校のプリンターの使用 資料配布 オンラインと対面の両立
グループ 28 (生物資源科学部)	時間の自由度の向上 何度も繰り返し復習できる	通信環境に左右される 試験での不正ができる	不正防止策を考案する 通信環境を考慮しオンデマンド型に	インターネット 掲示板活用 オンラインでのサポート拡充
グループ 29 (薬学部)	講義を見返すことができる 実技以外はオンラインでいいのでは	リアルタイム配信ができない場合にはオンデマンドに 通信環境のトラブル	通信環境トラブルへの対応を明確にする 学生の出席率を向上させる施策	学生間の交流 対面授業を録画して気楽に復習できるように
グループ 30 (通信教育学部)	今年のデータからより充実したオンライン授業 対面での折り合いができるように	友達ができないからやってほしくない	授業配信時間の統一 オンライン形式での提出方法を統一	オンラインでの相談環境 履修方法や単位取得法のマニュアル動画

### 3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートを元に「令和2年度 学生FD CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

最初に認知度に関する設問を分析していく。

表3-1-1

今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年	123	58.9%	86	41.1%
今年	89	48.0%	82	52.0%

表3-1-2

今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年	109	52.2%	100	47.6%
今年	73	42.7%	98	57.3%

上の2つの表は「FD」と「学生FD」の認知度について去年のCHAmmit アンケートの結果と比較したものである。まず、表3-1-1から「FD」についての認知度は昨年と比べて今年は10.9パーセント減少していることが分かる。さらに表3-1-2より、「学生FD」についての認知度は昨年と比べて10.5パーセント減少していることが分かる。

このように、昨年度と比べて「FD」、「学生FD」の認知度はどちらも約10ポイント程度減少している為、より一層FDの活動を知ってもらう為の活動を行う必要がある。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表3-2-1

「令和2年度日本大学学生FD CHAmmit」は全般的に楽しめましたか？

	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年	70	33.5%	107	51.2%	30	14.4%	2	1%	-	-
今年	55	32.2%	76	44.4%	30	17.5%	6	3.5%	4	2.2%

表3-2-2

「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
昨年	189	90.4%	20	9.6%
今年	148	86.5%	23	13.5%

表3-2-3

令和2年度 日本大学学生FD CHAmmit を通じて学部に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いませんか？

	必ず何かしたい		機会があればしたい		学生FD組織があれば関わりたい		思わない		わからない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
昨年	32	15.3%	109	52.2%	11	5.3%	17	8.1%	40	19.1%
今年	21	12.3%	85	49.7%	16	9.4%	21	12.3%	28	16.4%

上記のアンケート結果は CHAmmiT の活動を客観的に評価するにあたって重要なデータである。

まず表3-2-1を考察する。この表では今年「非常に楽しい」・「楽しい」と答えた参加者が全体の76.6%を占めており、非常に高い数値が出ていることが分かる。しかし、一方で「普通」・「あまり楽しくない」・「つまらない」と答えた参加者が昨年より増加していた。この問題はオンライン上でのコミュニケーションを図る上での難しさやオンライン上でのトラブルといった問題点が客観的に浮き彫りになったのではないかと考えられる。

次に表3-2-2を分析していく。この表では「学生FDを紹介したい」と答えた参加者は全体の86.5%を占めており、昨年と同様に高い水準を維持していることが分かる。しかし、前述した通り、満足度評価が芳しくない為、昨年より若干低い数値となっている。

最後に表3-2-3について分析していく。この表では「学生FD活動について何か行動を必ず起こしたい、もしくは「機会があれば起こしたい」と答えた参加者が全体の63.0%を占めていた。しかし、一方で「行動を起こしたいと思わない」と答えた参加者の割合が4.2パーセント増加していた。

以上のように昨年と比べて今年のFD活動は全体的に消極的・否定的な意見が目立った。しかし、評価を悲観的にとらえるのではなく、今後のFD活動の規模拡大に当たって、何をどのようにしていくべきかの指針になると考えられる。

表3-3-1

今年は、初めてZoomによるオンラインでのCHAmmiT開催でしたが、今後もオンラインでの学生交流のイベントはあった方が良いですか？ または、何かアイデアがある場合はその他に記載してください

今年	あった方が良い		対面と併用してほしい		対面が良い		その他 (アイデア)	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
全体	73	42.7%	66	38.6%	23	13.5%	9	7.4%

表3-3-1の結果から「あった方がいい」と答えた参加者の割合は42.7%であり、一方で「対面が良い」と答えた参加者の割合は13.5%であることからオンライン開催でも十分開催可能であることが判明した。また、「対面と併用してほしい」と答えた参加者の割合が38.6%であることから、新型コロナウイルスの流行が収束した後でも新しいFD活動の形として対面・オンライン両方の開催が望まれているのではないかと考えられる。

その他の回答としては「その他（アイデア）」の回答割合が7.4%と少なく、「学部内でも授業の悩みを共有したい」という意見や「対面での活動の代替策としてオンラインを実用化してほしい」という意見も上がった。目新しいイベントの提案として「SDGsを題材としたイベントを学生FDで開催してほしい」という回答があった為、次回開催する際の参加者側の意見として十分考慮した上で反映していくべきである。

このように教育を改善していく上では開催する会場となる場所の選定も今後考慮する必要がある、対面・オンラインでの開催を両立することで、より多くの人にCHAmmiTの活動を知ってもらえるのではないかと考える。

## 4. 学生コアスタッフからのコメント

### 4-1 「CHAmmiTの反省とオンライン授業の展望」 竹田 匠

(日本大学商学部経営学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ代表)

初めに、「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」開催にあたり、準備や協力をしていただいた担当教員及び学務課をはじめとする多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。特に、今年度の開催にあたっては、同じ会場に集まっての開催が新型コロナウイルスの影響で厳しく、初のオンライン開催となり、ZoomやGoogle Jamboardの設定など見える部分だけでも多くの準備をしていただいた。また見えない部分でも感染対策や事前準備など多くの部分で配慮していただき感謝申し上げます。

今年度の反省点は、やはり途中で連絡が取れなくなってしまったスタッフが10名ほどいたことだと考える。50名のスタッフと一緒に作り上げていくものでありながら、結局コアスタッフだけでほとんどの話し合いを行いまとめていた。さらにリハーサルと本番を除き全く顔を合わせることなく4カ月間活動を行なったことで、例年よりも明らかにスタッフのモチベーション維持が難しくなるであろうことはわかっていた。また、顔を合わせていないことにより、信頼関係の構築という面で非常に困難があった。しかしながら、限られた環境の中で最善を尽くすべきであったのに、全員でなし遂げることができなかったことは、今年度のCHAmmiTにおける最大の反省点である。

今年度のテーマである「オンライン授業のミライのカタチ」にはやはり「少しでも多くの学生の声を伝えたい」という思いが根幹にあったように思う。新型コロナウイルスにより急遽オンライン授業となり、学生も教職員も右も左もわからない状況から始まった。自分は学生なので、学生目線でしかわからないが、たびたび延期になる授業開始時期、いざ始まってわからないことだらけ、パソコンに慣れておらず困っているなど不安を抱え、学業面以外でも親の会社が業績不振、バイトに入れず生活困窮、就活や就職に対する不安など数えたらキリがないくらいの不安があったように思う。そんな中で先生方もどのようにしたらコロナ前とできる限り変わらない授業を行えるのか考えその限られた中で最大限の授業をしてくれているのだと感じた。その一方で、学生が不十分に感じている面も多くあり、オンライン授業の悪い部分を少しでもなくしてあげたいという思いが活動を通して日々に強くなる一方であった。

しかしながら、オンライン授業は悪い結果だけではなくたようにも思う。それは、感染対策という観点のみならず、「どこでも授業を受けることができる」「オンデマンド配信があれば聞き逃した箇所を聞き直すことができる」「テスト前に一気に復習することができる」などコロナ後も残していきたいと学生が感じる部分は大きくあったと感じる。

また、今年度、「オンライン授業のミライのカタチ」という部分には未来の要素を多く詰め込みすぎたように思う。学生が課題に感じている面ではなく、表面上のメリットやデメリットに終始してしまい、これからどうしていったらいいのかなどには深く入り込むことができず、「オンライン授業について率直にどう思っているのか」というような声を聞く機会を逃してしまったのは今後の課題であると考ええる。

オンライン授業の今後を考える上では、学生が不満に思っていることを最大限解消していくことが必要になる。その上で、アフターコロナとなっても対面授業とのハイブリッドなどの形でオンライン授業はある程度残るものと思われる。自分の所属する商学部では一つの科目に対して3人の先生が授業をするオムニバス形式の必修科目があり、オンライン授業開始以前から、先生により内容は同じであっても授業の方法が異なるため不公平だと感じている学生がいたことを覚えている。プロダクトをまとめている中でも、多くの学生が対面になっても繰り返し勉強したい、他学部の授業を履修したいというニーズを持っていることが分かった。これはオンデマンド授業により解消できる部分も大きいのではないかと思う。繰り返し授業を見られる

ようにすることは学習効果を高めるだけでなく、先生方の授業への準備に対する労力を削減することにもつながるだろう。加えて、ゼミナールや研究室などの少人数授業を拡充したりすることで、労力やコストを抑えつつも、学生がより学びやすい環境が作られ日本大学としての教育力も上がるのではないだろうか。これは日本大学が総合大学としてのブランド力を向上させることにも繋がるのではないかと考える。

最後に、新型コロナウイルスの中で開催を取りやめることが検討された中で、実際にオンラインでの開催を行ってくださったことに熱く御礼申し上げます。また重ね重ねになるが、開催に踏み切ってくださった学務課の皆様とFDワーキンググループの先生方・参加者、スタッフをはじめとする関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。そして、FD活動並びに学生FD活動の更なる発展を願い本稿を終わることとしたい。

#### 4-2 「CHAmmiT を終えて」 吉田 未来

(通信教育部法学部政治経済学科 4年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

初めに「令和2年度 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

私は今年度コアスタッフとしてFD CHAmmiTに参加した。コアスタッフに挑戦しようと思った理由は、自分から率先して行動したいと考えたからである。

私は昨年度、一般スタッフとしてFD CHAmmiTに参加し、企画班としてオープニングやエンディングの準備に携わっていた。しかし、昨年度は初めてのことで、自分がどのように動いたらよいか分からず、自ら率先して取り組むことができなかった。私は昨年度の反省を生かし、今年度はコアスタッフとして、自ら率先して活動し、一般スタッフとともにCHAmmiTを作り上げていきたいという目標を掲げた。

しかし、今年度はコロナウイルス感染拡大により、オンライン開催となったCHAmmiTに大きな不安を抱えていた。それは一般スタッフとのコミュニケーションである。数少ないミーティングの中でコミュニケーションをとることは、対面で行っていたときと比べて、難しいことであると思っていた。さらに、今回はオンラインという限られた環境の中で、ミーティングを行ってきたが、例年より時間も少なく、アイスブレイク等で交流を深める時間もなかった。私たちは少しでも一般スタッフと交流を深めたいと考え、ミーティング後に懇親会を行い、オンライン上で出来るゲームなどで盛り上がりたが、最初こそは順調であったが、後半は参加者も減り、数人の一般スタッフとしかコミュニケーションをとることができなかった。またコミュニケーションの他に、オープニングやエンディング等の役割分担を一般スタッフに振ることができなかったことも今回の反省点であると考え。私たちコアスタッフは定期的にミーティングを行っていたことにより連携がとれていたため、最終的にはコアスタッフ内で仕事を回すことになり、一般スタッフに仕事を割り振ることができなかった。私は今回のCHAmmiTを振り返ってみると、自分の目標を達成することができなかったが、一般スタッフや教職員とともにCHAmmiTという大きなイベントを成し遂げられたことについては大きな達成感があった。このような状況下で人との関わりが失われかけていたが、CHAmmiTを通して、多くの人と関わることは、私にとって嬉しいことであった。最後になるが、来年度以降のFD活動がさらなる発展を遂げられるよう心より願っている。

#### 4-3 「CHAmmiT の反省点とその改善点」 大貫 陽司

(経済学部金融公共経済学科 3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

初めに「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」を開催するにあたりご協力いただいた教員の皆様並びに職員の皆様そして学生スタッフの皆様にお礼申し上げます。

今回のCHAmmiTの運営にあたっての反省点は以下の通りである。

- (1) スタッフミーティングやCHAmmiTで話し合う議題を決定する際にコアスタッフ内のみで決めていたため、アイデア不足に陥ったこと。

(2)一般スタッフに仕事の割り振りが行われず、コアスタッフと一般スタッフでの間に温度差が生じてしまったこと。

(3)オンライン開催であったため、スタッフ間で雑談等のコミュニケーションをとる時間が取れず、信頼関係の構築ができなかったこと。

(1)(2)が起こってしまった原因として、スタッフ内での仕事の割り振りがうまくいっていなかったことがあげられると思う。これは昨年も起こっていたことであるが、CHAmmiTでは一般スタッフを含めた大人数の人たちと連携をとることが難しいため、コアスタッフが学務課の職員及び担当教員と連携を取りプロダクトを作成するという形態をとっている。そのため、コアスタッフに仕事が集中し、一般スタッフには仕事がほとんど回らないという状態になってしまった。

(3)の原因については、オンライン上のミーティングであったため、信頼関係の構築が難しかったこともあるが、それ以外にもミーティング時間が例年よりも短かったことに加え、ミーティングのテーマの実用性を重視しすぎたことにより、スタッフ間でお互いを知る時間をあまりとれなかったことがあげられると思う。ミーティング後にスタッフ同士の交流を深めてもらうために、懇親会を実施していたが、10名程度しか集まらず、集まる顔ぶれも毎回変わらなかった。やはり、全体ミーティングでの一定の信頼感の獲得が必要だと感じた。

これらの反省点を改善する策として、比較的早めの時期に班割りすることが効果的であると思う。コアスタッフを中心にスタッフをいくつかの班に分け、ワーク活動（アイスブレイクやプロダクトの作成等）を行うことで、一定の信頼関係を構築する。班割りを行うことで全体ミーティングでは聞きづらい細かい質問にも対応でき、ミーティングの途中で来なくなってしまう人を減らすことができると考えている。

最後に活動を通しての感想を述べ、本稿を終わりたいと思う。

私が今回コアスタッフに立候補したきっかけは、本年度のCHAmmiTの代表者である竹田匠に勧誘されたことであった。去年、一般スタッフとしてCHAmmiTに参加していたため、コアスタッフの仕事が忙しいことを知っていたので、正直あまり乗り気ではなかったことを覚えている。しかし、プロダクトの作成やミーティングで本番に向け準備を進めていくと不思議なもので、活動のほとんどを終えた今ではコアスタッフをやってよかったと思えるようになった。今年はオンラインの開催であったため、去年とは勝手が違い、手間取った部分も多かったが、ZoomやGoogle Jamboardなどオンラインならではのツールを使うことでオンラインということ以外は例年とほとんど変わらない形で開催できたと思う。今後はコロナウイルスの状況次第ではあるが、授業や就活などの活動もオンライン化が進むと思う。そのため、今回のようなオンライン上で何かを成し遂げたという経験は大きな財産になったと共に私の大学生活の大きな成果になった。

#### 4-4 「オンライン CHAmmiT の終わり、そして始まり」青砥 光希

(日本大学文理学部哲学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

はじめに、この日本大学学生FD CHAmmiTに関わってくださったすべての人たちに感謝を申し上げる。そもそも、今回の日本大学学生FD CHAmmiTは開催できるかどうか怪しかった。2020年は新型コロナウイルスという病原体が、日本のみならず世界中で流行し、今これを執筆している2021年でも流行は留まるどころかさらに感染が拡大している。今の段階でも収束する見込みが全くない。この社会的状況の影響で様々な活動が中止になった。大学の活動もその例外ではなく、授業がオンラインになったり、部活動ができなくなったりなど被害が甚大である。

そんな中で日本大学学生FD CHAmmiTも対面での開催ができないため中止になる可能性があった。私はこのことが非常に残念であった。なぜならこのイベントは学生と教職員の考えを共有して日本大学をよりよくしようとする伝統あるものだったからだ。この伝統が途切れてしまうことは、FD団体だけでなく、日

本大学全体の損失であると感じた私は、日本大学学務課宛てに学生FD CHAmmiT をオンライン上で開催したいというメールを送らせていただいた。そのメールに効果があったかは分からないが、結果的に日本大学学生FD CHAmmiT はオンラインで開催されることが決まった。これによって上述した伝統を守ることができたので、とても嬉しい気持ちになった。

さて、話は変わって今回のCHAmmiTのテーマは「オンライン授業のミライのカタチ」というものであった。これはオンライン授業が主流になってきた今に焦点を当てた素晴らしいテーマだと思う。私たちは学生であるため学生側の意見を出すことは簡単にできるが、教職員側の意見を出すことは少し難しいところもある。今大学はいくつかの批判にさらされている。特に日本大学は授業だけでなく部活動やその他の活動も辞めているためそれを再開して欲しいという意見がとても多くある。一見するとその主張は正しい。しかし、教職員の立場から見ると、大学でクラスターが発生することが懸念されるのである。このように学生と教職員の意見は違うのだ。しかし、我々は自分の立場に固執してしまいがちである。その価値観が今回のCHAmmiTで少しでも変化したのではないかと私は感じる。確かにこのイベントは推薦スタッフの方の中にもそこまで関心をもたない人もいたり、あるいはそもそもこのような活動に興味を示さない人もいたりする。それでもやはりこのイベントを行った価値は大きいのではなからうか。それを感じることができたのは、今回一番良かった点である。

一方、もっと改善しなければならないことはこのイベントをいかにして広げていくことかということである。例えば、前述した通り主にコアスタッフや一部の学生スタッフは意識の高かった。しかし、学生スタッフの中にも意識があまり高くない人もいたことは事実である。今回はオンライン上での活動であったため、なかなかモチベーションが上がらないのは分かるが、もう少しやる気が必要な場面もあった。もちろん他にも改善するべき点は多々あるが、私としてはまずやる気をもってイベントに取り組むということが何よりも大切なことであると思う。その点で言うと、もう少しやる気をもたせることができれば良かったのかなと思う。

今回のCHAmmiTはあくまでも通過点である。CHAmmiTというものは開催するだけでなく、そこから先どのように行動を起こすのかということがCHAmmiT自体を行うことよりもはるかに大切なことである。私も今行動を起こそうとしている。私は文理学部学生FDの代表として活動しているが、そこでは学生が授業を企画したり、文理学部長と懇談したりなど、学生がよりよい大学生活を送るために活動している。まだまだ発展途上の団体であるが、このような団体を文理学部だけでなく、日本大学のその他の学部にも広げていくことができればよいと思う。そのきっかけとして私はまた交流会というイベントを開催しようと今企画をしている。尤もこのイベントも実現するかは分からないが、今自分たちには何ができるのかということを探している。今回のオンラインCHAmmiTの開催により、まだまだオンラインでの活動に可能性を感じることができた。今後の学生FDの発展のためにもっと行動していこうと私は感じる。

最後に最初でも述べたが、今回の日本大学学生FD CHAmmiTは一人の力ではとてもできない大きなイベントであった。このイベントを支えてくださったすべての人に改めて感謝申し上げる。今後の日本大学学生FDの発展は非常に楽しみであり、それを願いつつ行動していくことを抱負として本文を終わらせていただく。

#### 4-5 「オンラインという名のターニングポイント」 小林 歩武

(日本大学国際関係学部国際教養学科2年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

突然舞い込んできたコロナウイルスに伴い授業のほとんどがオンラインでの開講を余儀なくされ、サークルや部活の活動さえもできず留学もできない状況となった。人との距離を保つことだけが要求され、例年おこなわれてきた当たり前のような学校生活が失われた今学期であった。そのため、たくさんの学事行事も中止を



余儀なくされ、FD CHAmmiT も取りやめる検討がなされた中であつたが、オンラインという媒体を用いて日本大学に所属しているさまざまな人との交流ができ、教育について話し合う例年の対面形式になぞって開催できたことは非常に喜ばしく思えた。また初めての試みであるオンラインでの開催に準備や協力してくださったすべての方々に厚く御礼申しあげる。

わたしは昨年度のFD CHAmmiT にも一般スタッフとして活動した経験があつた。しかし、今年度はコアスタッフとして初めてのオンライン開催を迎えるにあたって非常に苦勞をした。なぜならば、対面で会うことはなく、すべて通信媒体を用いるため、一般スタッフとの交流が難しく関係を築くのは大変だったからである。しかし、コアスタッフ同士では予定が合いさえすれば気軽にミーティングできるのはオンラインの良いところでもあつた。そのような面があるため例年は一般スタッフと協力して行うオープニングとエンディングなどもコアスタッフが担うことになった。これにより、例年と比べてコアスタッフの仕事量が増え、一般スタッフの活動量が減ってしまい、グループで協力しての活動が減ってしまったのは今年度のFD CHAmmiT の反省点である。

コアスタッフとして約半年間活動させていただいたことで、オンライン授業は本来コロナウイルスの感染防止対策でありながら、オンライン授業のありのままをみんなで話し、現在の課題を参加者と共有できたのは、この状況下ではなかなかできないことだと思う。また、「ミライのカタチ」について、オンライン授業をどうしたら今後に生かせるかという一歩踏み込んだ内容を話し合えたこともとても貴重な時間となった。

わたし個人の反省点としては、資料作成の準備の遅れやわたし自身のモチベーションの維持が難しかったことが挙げられる。実際にスタッフと会うことなく一人での作業となったため、モチベーションの低下により、資料作成に対する意欲やわたし個人のミスが相次いでしまった。また、これはオンラインのつきものであるが、通信環境の不具合やパソコンの不調でパソコンが落ちてしまうことが多々あり、メンバーに迷惑をかけてしまったこともあつた。

今年度のFD CHAmmiT は日本大学のこれからについて考えるような重要なものであつた。そのような大きい行事にコアスタッフとして参加できたことは誇らしく、これからの大学生活にも何かしらの形で生かしていきたい。最後にFD活動がますます活発化して、より良い日本大学になることを願望として本稿を終わらせていただく。

#### 4-6 「史上初！オンラインCHAmmiT を終えて」 竹田 蘭丸

(日本大学国際関係学部国際総合政策学科1年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

まずは、このコロナ禍で初のオンライン開催ということになり、実現の難度が幾度も高まった中で、準備や協力をしてくださった担当教員及び、学務課の方々に厚く御礼申し上げる。

私が一年生でコアスタッフとして参加した経緯は、三点の理由がある。

一点目は、FD CHAmmiT に関心を抱いたからである。私の学部では、ポータルサイトでスタッフの募集をしていた。そこで私は全16学部の人たちと関わることや、自分の考えを伝えることで少しでも学校をより良くできるという点に魅力を感じて、ぜひ参加してみたいと思った。

二点目は、例年なら対面授業で友達ができたり、先輩と関われたりできるが、本年は新型コロナウイルスの影響で、一切、これらのことができなかつた。そのため、私は多くの人と関わったり、友達を作れたりする機会を探していた。そんな中、FD CHAmmiT の話が舞い込んできて、ちょうどそういった機会を見つけたと考えたのである。

三点目は、私が大学に入る際、ボランティア活動や学内の活動に積極的にとりくみたいと考えていた点である。私は高校時代、あまり積極的にそういった取り組みをせず、人との関わりも薄かつた。だから、あまり学校生活も充実していなかつた。今回、FD CHAmmiT のスタッフとして参加させていただいて、私は今、

非常に充実している。

本年は誰も経験したことがないオンライン授業がテーマになり、例年以上に良いしゃべり場になったと考える。そして、CHAmmiTに参加させていただいて、非常に良い経験ができた。来年度、商学部ではすでにハイブリッド授業になることが決まっている。このように私たちの意見がしっかり取り入れられることは、非常に嬉しく、素晴らしく感じる。

私は7月11日の第一回のミーティングからChammiT当日までを通して、本当に参加して良かったと思う。私自身のスキルも上がったと考える。それは、資料作成や人に伝える難しさを学ぶことができたからである。また、反省としては「期限がまだ先だ。」「これくらいできていれば良いだろう。」という油断をしてしまったことである。そのため、リハーサルの準備不足や次にやるべき行動が遅くなってしまった。つまり、授業とこの活動を上手く両立できなかった。この反省点を意識しながら、今後も様々な活動を行っていきたい。また、コアスタッフの中でも引っ張って頂いた先輩方のようになるために頑張りたい。そして、FD活動がますます活発化してより良い日本大学になることを切望し、本稿を終わらせていただく。

#### 4-7 「令和2年度学生FD CHAmmiTを終えて」 落合 凌也

(日本大学経済学部経済学科3年・令和2年度学生FD CHAmmiT学生スタッフ)

##### ・CHAmmiTに対して思うこと

私は今年度、CHAmmiTの一般スタッフとして参加した。参加した理由は二つある。

1つ目は昨年度、CHAmmiTのスタッフだった友人に誘われ、ゲストとして参加した時に「大学の授業の在り方」についてもっと考えてみたいと思ったからである。

次に2つ目は、新型コロナウイルスの影響で全面オンライン授業となってしまったことから、今度は参加者側ではなく、運営側としてCHAmmiTの活動に参加して「よりよい授業形態とは何か」ということを考えてみたいと思ったからである。

半年間を振り返ってみると、初めてオンラインのミーティングをした時から本番終了まで、とても短くも濃厚な半年間であったと思う。なぜなら、私は元々一般スタッフとしてこの活動に参加していたが、運営側として積極的に活動に参加することができたからである。私自身、転部前は楽な方、楽な方にと流れ、明確に自分のやりたいことなどなく、周りに流されて生活を送りがちであった。

しかし、転部後は自分が今できることを仲間と一緒に全力で取り組みたいと考えていたため、コアスタッフの人たちと交流を深めることでとても精力的に活動をすることができたと思う。

##### ・CHAmmiTに関わって感じたこと

今回CHAmmiTに関わって感じたことは2つある。それは「自分一人だけでなく、周りとの協力してイベントを盛り上げる楽しさ」と「自分が思ったことを発信していくことの大切さ」である。前述した通り、やりたいこともなく流されていた時期があったが、自ら考え、仲間と協力することの大切さを身をもって痛感した。また、コアスタッフの人たちを始めとした、日本大学職員の方のサポートや、在籍している教授陣からのフィードバックがあったからこそ、初めてのオンラインでのイベントを盛り上げることができたのだと思う。来年の状況は正直誰にもわからないが、オンライン授業の在り方について学生、教職員の方も含めみんなが一度立ち止まって考える機会であったことは間違いのないと思う。

##### ・感想

自分は3年生での経験だったが、正直至らない点が多くあったと思う。しかしながら、コロナ禍で活動が制限される中、自ら課題や目標を設定して仲間と協力して達成させるいい機会になったと思う。今回の経験を社会人になってからも活かしていきたいと思う。

また、もし機会があれば4年生でも、次はコアスタッフとしてFD活動に参加していきたいと思う。

#### 4-8 「令和2年度学生FD CHAmmiT を終えて」 梅村 智輝

(日本大学生産工学部数理情報工学科3年・令和2年度 学生FD CHAmmiT 学生スタッフ)

まず初めに「令和2年度 日本大学学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、ご協力いただいた教員の皆さま並びに職員の皆さま、学生スタッフの皆さまにもお礼を申し上げます。

昨年度に引き続き、今年度もCHAmmiTの一般スタッフとして参加した。参加した主な理由は「友達を作り人脈を広げる」である。小中高はクラス分けがあり、同じ教室の中で同じ時間を過ごすため、自然と友達が出来ていくと思うが、大学では違う。大学では、基本的に授業ごとに教室の移動が必須となり、個人の席も決められているわけではなく、毎回違う席に座っているのがほとんどである。そのような環境の中、友達を作るのは難しいであろう。そんな中このCHAmmiTでは、学生スタッフとして参加すると、他学部の人たちと同じ目標を立て、同じゴールに進むため、自然と仲良くなれると思い参加した。実際、人脈は増えたと感じられる。またCHAmmiTでは、学生スタッフがファシリテーターとして進行していくため、限られた時間の中で課題を達成する力、学生の意見をまとめる力や意見を引き出す力が身に付いたと感じられる。現在もオンライン授業のため、多くのグループワークがあるが、私の中では上手に出来ていると感じられる。

最後に、またCHAmmiTのようなイベントがあった際には、参加したいと思う。身に付けたスキルを学生生活だけではなく、社会にも通用するレベルまで伸ばしたいと思う。